

描くこと、つくることへの意欲に関する考察
図画工作・美術における苦手意識との関係性

野村真弘

描くこと、つくることへの意欲に関する考察

図画工作・美術における苦手意識との関係性

A study on motivation in art

Relationship of the sense of aversion for the education

野村 真弘

Nomura masahiro

要 約

図画工作・美術に対する苦手意識と比較して、「絵を描くこと」、「ものをつくること」の好き、嫌いといった心理的な傾向はどのような関連性をもつのだろうか。先行研究による、図画工作・美術への苦手意識に対する調査研究をもとに、「絵を描くこと」、「ものをつくること」の好き、嫌いの傾向を調査し、それぞれの割合を比較した。それによって、「図画工作・美術への苦手意識はあるが、絵を描くことは好きである」、また、「図画工作・美術への苦手意識はあるが、ものをつくることは好きである」という傾向をもつ割合が一定数いることを各データと共に明らかにした。特に、後者の傾向はより顕著であった。そして、図画工作・美術に対する苦手意識には「絵を描くこと」に対する様々な経験が影響を与えているのではないかと、という推論をもとに、それに伴う経験を調査した。「絵を描くこと」に関するそれぞれの経験を抽出することによって、図画工作・美術における「絵を描くこと」の二面性が浮き彫りとなった。以上から、先の推論は概ね正しいと言えるのではないかと結論に達し、これに対する考察を加えた。

1. はじめに 図画工作・美術への苦手意識に関する先行研究から

おおそ幼児期から高等学校に至るまで行われている、造形・図画工作・美術の教育とは、どのような成果を産んでいるのだろうか。近年を問わず、表現に関する科目の軽視が叫ばれ続けているが、その現状に目を向けてみると、表現、図画工作、並びに美術の教育に関わっている者として、無力感を得ずにはいられない場面にも接することもままある。表現に関する科目、図画工作・美術はどのようにして捉えられているのだろうか。さらに、教科の枠を超えて幅広く「絵を描くこと」、「ものをつくること」とは、いったいどのように捉えられているのだろうか。

次頁、図1～4は、図画工作・美術への苦手意識に関する平成 26～27 年度の調査研究として提出されたデータによる

引用である(*1)。小学校教員養成課程と保育士過程に在籍する大学生、また、美術科教育法を履修している大学生を含んだ調査では、図画工作・美術への苦手意識が「少しある」、「かなりある」と答えた学生が全体の 60%に及んでいる(図1)。

それに対し、小学生に対する同様の調査によれば、図画工作・美術への苦手意識が「少しある」、「かなりある」と答えた児童は 14%である(図2)。

同研究によれば、図画工作への苦手意識については学年が上がるにしたがい、少しずつ増えているという結果も指摘されている。その結果からも予想できるように、公立の中学生に対する調査では、図画工作・美術への苦手意識が「少しある」、「かなりある」の割合は 35%である(図3)。

高校生に対する調査も同様に行われているが、高等学校においては、芸術科目としての選択制であり、その割合は直接比較・考察ができないものとしているが、苦手意識が「少しある」、「かなりある」と答えた生徒は 32%である(図4)。

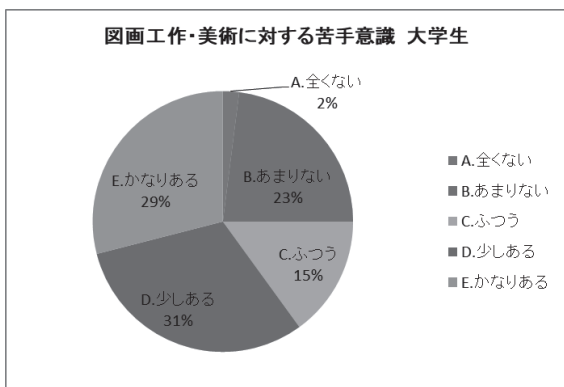


図 1

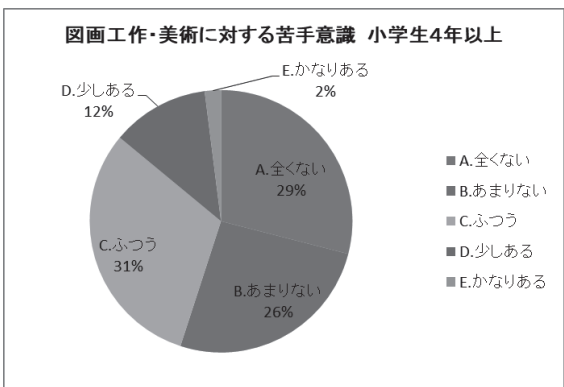


図 2

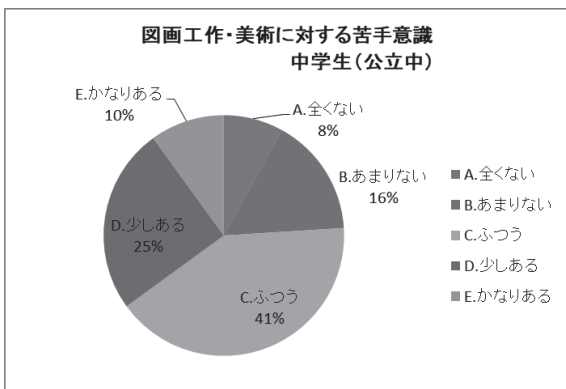


図 3

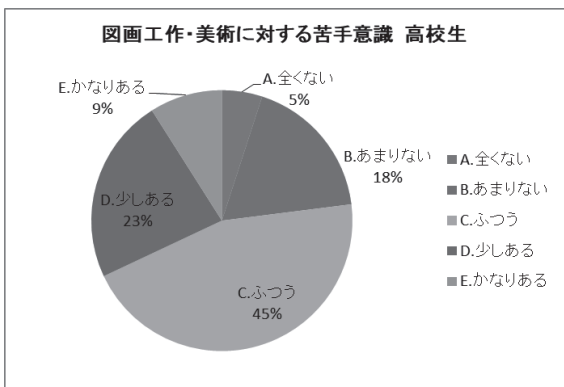


図 4

2-1. 図画工作・美術への苦手意識と、「絵を描くこと」への好き・嫌いの傾向とその関連性

先述した調査結果は体感的にも納得できるものであろうと思われる。この結果を踏まえたくえ、ここでは図画工作・美術における苦手意識と、「絵を描くこと」との好き・嫌いの感覚との関連性について探してみたい。

以下は筆者の赴任校で、入学後間もない保育士養成課程の一年生を対象にして行った、「絵を描くこと」に対する好き・嫌いの傾向の調査結果である。必修科目である「図画工作」の履修生 97 名に対してアンケート形式によって行った(図5)。

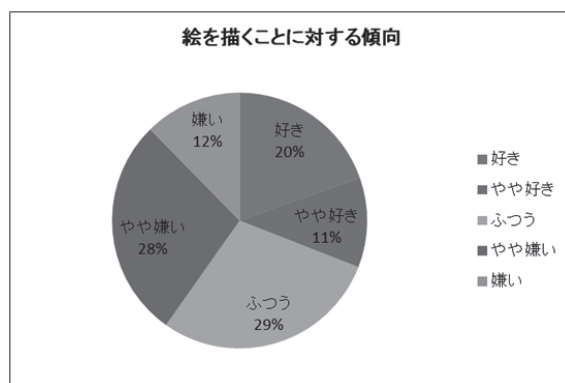


図5

これによると、「嫌い」、「やや嫌い」と回答した学生の割合は全体の 40%にも達するが、先に挙げた苦手意識の調査によれば、大学生を対象とした場合と比較すると、その割合は多分に低いように見られる。これに対して、「好き」、「やや好き」と回答した割合は全体の 31%である。同様に、先例の結果と比較してみると、苦手意識が「全くない」、「あまりない」と答えた割合は 25%である。この結果によれば、対象とした学生達は「絵を描くこと」自体に対しては、やや好意的に捉えているということがわかる。また、これによって「図画工作・美術への苦手意識はあるが、絵を描くことは普通、もしくは好きである」という傾向を持った学生がいることがわかる。

2-2. 図画工作・美術への苦手意識と、「ものをつくること」への好き・嫌いの傾向とその関連性

「絵を描くこと」と区別して、主に立体的な創作物や手芸等に焦点を当てた場合、どのような傾向があるのだろうか。次頁図6は、「絵を描くこと」に対する傾向と同時に、同様の対象と手段によって得られた結果である(図6)。

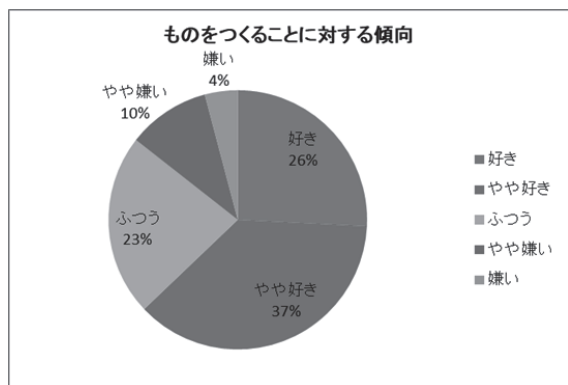


図6

絵を描くことと区別して、「ものをつくること」に関しての調査をしてみたところ、「嫌い」、「やや嫌い」と回答した学生の割合は14%に留まった。これに対して、「好き」、「やや好き」と回答した割合は全体の63%にも達した。「ふつう」と回答した割合を含めると86%にも達する。「絵を描くこと」と「ものをつくること」とは、どちらか一方に好感が偏った者も見られ、「絵を描くこと」と「ものをつくること」との好感度の差を、アンケート上の表記で二項目以上空けて回答した学生は28%、その内、「ものをつくること」に関心を示していた学生の割合は86%にも上った。先に示した研究による調査結果と比較すると、その内訳には大きな差が出ている。このことから、「図画工作・美術への苦手意識はあるが、ものをつくることは普通、もしくは好きである」という傾向を持った学生は、「絵を描くこと」への関心を持った学生よりも、予想以上に多くいるということがわかる。それと同時に、潜在的に何かしらの製作への関心を持った学生は多くいるのだということがわかる。

3. 「絵を描くこと」と「ものをつくること」に対する傾向への考察

筆者が実施したアンケートにおいて、図画工作・美術に関して、「良かった思い出や嬉しかった思い出」、「嫌だった思い出や悲しかった思い出」について自由記述の欄を設けた。97名の対象者のうち、73名の回答者を得ることが出来た。その内、「良かった思い出や嬉しかった思い出」の回答数が66、「嫌だった思い出や悲しかった思い出」の回答数が49である。「良かった思い出や嬉しかった思い出」における回答のうち、「絵を描くこと」による達成感や受賞の経験、他者からの評価等を具体的に示した回答数が19人、「ものをつくること」による同様の具体的な経験を回答した者が12人であった。それ以外の回答では、それが「絵を描くこと」による経験か、「ものを

つくること」による経験かを判別できない回答であったため、除外している。その結果は以下のようになる(図7)。

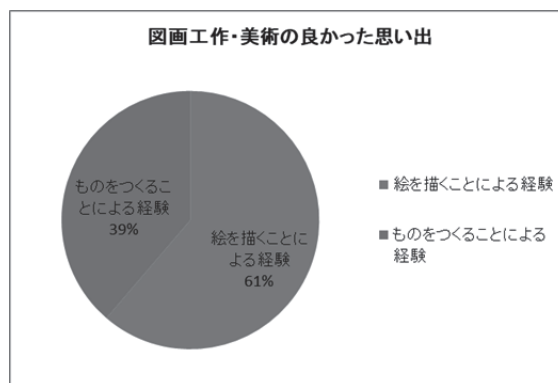


図7

次に、「嫌だった思い出や悲しかった思い出」に関する内訳をみる。得られた回答数49の内、「絵を描くこと」による嫌な経験、評価を得られなかったことや、上手いかなかった経験等、具体的に示していた者は27人、「ものをつくること」による同様の具体的な回答は6人であった。また、「絵を描くこと」によるものか「ものをつくること」によるものを判別できないものは、先と同様に除外している。この結果は以下のようになる(図8)。

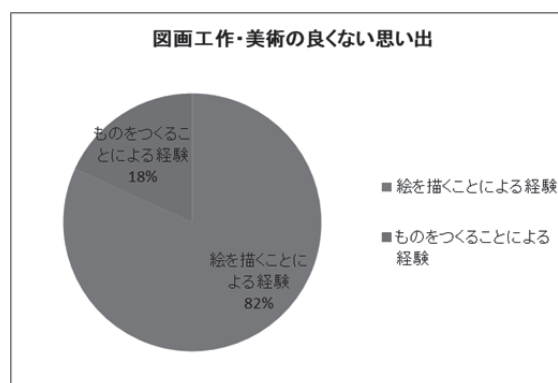


図8

これによると、「絵を描くこと」による嫌な経験が、「ものをつくること」による嫌な経験より大幅に占めていることがわかる。つまり、「ものをつくること」に関しては「絵を描くこと」よりも嫌な経験をするのが少なく、そうした経験も比較的にはあまりない、ということであろう。これが、「絵を描くこと」と「ものをつくること」との心理的な好き、嫌いの傾向に影響を与え、その差を示しているのだらうということが判断できる。

4. おわりに

これまでの調査と考察から、「絵を描くこと」に対して好意的な関心を持ちながらも、図画工作・美術に対しては苦手意識をも

っている学生がいること、そして、「ものをつくること」に関してはその傾向が大きく見られる、ということがわかった。そして、これまでに経験してきた図画工作・美術においては良かった思い出や達成感など、印象的なものは比較的「絵を描くこと」に表れるが、同時に、嫌な経験としても記憶に残りやすいという二面性を表していた。「ものをつくること」に関しては、直接的に嫌な経験をすることが比較的少なく、そのことが心理的な好き、嫌いの傾向に影響を与えているのであろう、ということがわかった。なぜ「ものをつくること」に関しては、このような結果が現れるのであろうか。

図画工作・美術に対する苦手意識とは、その「教科内において絵を描くこと」の苦手意識から端を発しているのではないだろうか。古来より、人は物心のつく以前から絵を描くことに対して身近であった。V.ローウェンフェルドや H.リードの言説に倣うのであれば、図式的表現以降に訪れる挫折感がそのまま図画工作・美術に対する苦手意識に直結しているのではないか。図画工作・美術に対する「嫌だった思い出や悲しかった思い出」の多くが「絵を描くこと」に関する記述であったことから、そのようなことが思い浮かぶ。しかし、本稿による結果において学生は、潜在的には「絵を描くこと」に関してやや好意的に捉えているようであり、とくに、「ものをつくること」に関してはそれが特に顕著であった。「図画工作・美術への苦手意識はあるが、絵を描くことは普通、もしくは好きである」という傾向をもった者、特に、「図画工作・美術への苦手意識はあるが、ものをつくることは普通、もしくは好きである」という傾向をもった者に対するアプローチは今後直近の課題になりそうである。

注

*1) 降旗孝, 2016, 「図画工作・美術への〔苦手意識〕の実態と解消のための要素 ―目指すべき造形美術教育の教育コンテンツ開発に向けて―」, 大学美術教育学会誌『美術教育学研究』48号, pp.370-371

参考文献

1) 降旗孝, 2016, 「図画工作・美術への〔苦手意識〕の実態と解消のための要素 ―目指すべき造形美術教育の教育コンテンツ開発に向けて―」, 大学美術教育学会誌『美術教育学研究』48号, pp.369-376

- 2) 福田隆眞、福本謹一、茂木一司編著, 2015, 『美術科教育の基礎知識』, 建帛社
- 3) 岡健・金澤妙子編集, 2013年, 『演習保育内容 表現』, 建帛社
- 4) 花篤實・岡田愨吾編集, 2010年, 『新造形表現 理論・実践編』, 三晃書房